

事例

これから治療について説明を受けるが その前に聞いておきたい

1

相談者は、診断時の医師の説明がよく理解できなかったため、次回受診前にピアサポーターから話を聞いておきたいという。今後についても相談相手がいないと不安そう。

1 相談内容 70代女性 乳がん患者

相談者（70代）は乳房に痛みがありN病院で検診を受け、その結果でI病院を紹介された。

乳房の内側に腫瘍が見つかり乳首にも疑いがあるということだった。乳首にがんがあれば手術は全摘になると言われ、そうでなければ温存手術になると説明をされた。

また、センチネルリンパ節の生検は手術中に検査をしながらすすめると言われた。他にも医師から説明をされたが理解できなかったので、ピアサポーターにいろいろ聞きたいということだった。

相談者は夫に先立たれ、一人暮らしである。子供は長男のみで、海外に赴任しており支援は望めない。退院後の生活のことが心配である。もし予後が悪くて、自分のことが自分でできなくなった場合は、どのようにしたらいいのかわからない。今のうちに施設に入ったほうがいいのだろうか。誰に相談したらいいかわからない。

2 相談内容のポイント

- 1 乳がんと診断され最初の説明を受けたが、テンポが速くて十分理解できなかった。
- 2 次回、医師の説明時に予備知識をもって聞けるように準備をしたい。
- 3 退院後の生活のことや今後のことも心配だが、誰に相談したらいいのかわからない。

3 ピアサポーターの対応のポイント

- 全摘か温存手術かの概略は説明を受けているため、その後の治療についての一般的なことを話した。（患者向けの乳がんの本に書かれている内容にそって話した）
- 温存手術になれば手術後に放射線治療を行うことが一般的といわれている。
 - 手術後、組織検査をしてホルモン感受性やHER2が陽性かどうか、また、いずれも陰性かを調べる。その結果でホルモン療法やハーセプチン・抗がん剤による治療など決められると思うと伝えた。
 - センチネルリンパ節にがん細胞がとんでいるのか、その結果でリンパ節の郭清が行われると思うと話した。
 - 退院後の生活上の心配や、施設の入所のことなどは、かかっている病院の医療相談室やケースワーカーに相談できること、在宅療養については訪問看護や訪問介護、デイサービスなど色々な方法があるのでケースワーカーや居宅介護支援事業所などに聞いてみることを勧めた。

4

ピアサポートの結果

相談者は病院からもらった冊子を見ながら、ピアサポーターの話と、冊子に書いてあることを確認されていた。メモをとり、次回、医師から治療方針を聞く時は理解できると思うと言われた。

退院後の生活のことも相談できる場があることを知り、安心したと言われる。今は自分のがんのことや治療のことをしっかり理解して、手術に向けて体調管理をしたいということだった。

「話を聞いてよかった」と繰り返し言われ、明るい表情で帰られた。

5

対応したピアサポーターの所感

大変聡明な方で、ピアサポーターの話をすぐに理解されたように感じた。冊子とピアサポーターの話を照らし合わせるように確認され、きちんと復唱されるようなところを見ると、お若いころに職業的にトレーニングされた方と感じた。

このような方でも、主治医の最初の説明は理解できなかったという。がんの告知による衝撃もあると思うが、医療者には高齢患者にもっとゆっくり話していただくこと、ポイントは繰り返ししていただくことをお願いしたい。

考察

この事例から学ぶこと

信頼できる情報源を元に、相談者の安心につながる情報提供を行い、医療者との信頼関係構築をサポートする。

【事例の背景と課題】

- 相談者の問題：高齢者で一人暮らし、医師の話が十分理解できない、家族は海外在住で支援が望めない。
がんの治療でQOLが低下し、退院後自分のことが自分でできなくなった時の不安がある。

【ピアサポーターに必要な知識や情報】

- 信頼できる図書やインターネットサイトを知っておくことにより、それを活用して医療情報を的確に伝えられる。社会資源として、「がん相談支援室」の役割、「地域包括支援センター（名古屋市はいきいき支援センター）」の役割などを知っておくことにより、相談内容に応じて社会資源の紹介が可能となる。

【講評】

今後の治療などについて、患者向けの乳がんの本の内容に基づいてきちんと説明がされている。治療のことなどについては、自分の体験や知識だけで説明をしないことが重要である。また、相談者が不安に思っている退院後のことについて、社会資源が利用できることを説明し、相談者を安心させている。

強いて課題を挙げるとすれば、もう一度、主治医に理解できなかったことを聞くことを促しても良かったかも知れない。そして主治医への質問内容を相談者と一緒に考えてメモにすることも一つの方法と考えられる。

高齢がん患者、特に家族の支援が得られづらい患者に対してはキーパーソンが必要と考える。高齢がん患者が、常日ごろから地域の人々（民生委員、町内会など）と密接に繋がっていくことが大切であり、行政などが中心になってその支援をしていくことも必要ではないか。また、今後は、ピアサポーターがそのキーパーソンの役割を担うという可能性も考えていく必要があるのかも知れない。